

寓話の魅力論ず

『莊子』・『百喻経』・『イソップ物語』の寓話を例として

黄 華 珍

On Charm of Fables, Referring to Zhuangzi, Baiyujing and Aesop's *Fables*

Huang Huazhen

はじめに

寓話とは、ある物語に託して一つの道理を説き明かしたものであり、教訓または風刺を含めたたとえ話でもある。世界の多くの国・民族の文化の中に寓話が存在している。例えば、中国の先秦時代に生まれた『莊子』をはじめとする各種の古典に見える寓話・古代インドに生まれた『百喻経』の寓話・古代ギリシアに生まれた『イソップ物語』（中国語名は『伊索寓言 yīsǒ yùyán』）の寓話は、いずれもよく知られているものである。しかし、読者が最も多いのは、やはり『イソップ物語』であろう。

関連資料¹⁾によれば、『イソップ物語』の最初の漢訳本は『競義』という名を付けられたものであり、明の熹宗の天啓五年（1625）に西安で刊行された。これは北フランスに生まれたイエズス会士であるニコラ・トリゴアの口授により、張賡が記録したギリシア寓話を31篇収めたものである。清代に入ってから、更に何種類もの訳本が出版されたことがある。それ以来、時代の移り変わりとともにその愛読者も次第に増えてきて、特に現代社会では、その一部の内容が教科書に編入されるに至り、ついに中国においてもよく知られるものとなった。一方、日本では、文禄二年（1593）に天草の耶蘇会学林板刻の「イソポのハプラス」（ローマ字本）として紹介されたのが始まりで、これはポルトガル語からの翻訳とされている。その後、江戸初期の寛永十六年（1639）から「伊曾保物語」として各種出版され、次第に普及していった。要するに、『イソップ物語』という寓話の伝来については、中日両国とも約400年の歴史を持ち、その愛読者の数は時代によって異なるけれども、いずれの国においても『イソップ物語』の栄養を取り入れて成長した人間は数え切れないほどであり、今後も増えつつある傾向にある。

ところで、中国では寓話というものは古来文学作品の体裁の一つとして考えられてきた。多くの先秦時代の寓話の中でも、『莊子』に見える寓話の数は最も多く、社会に与えた影響も大きいのである。ただし、『莊子』は中国の道家に属する哲学書であり、児童書に变身させられた『イソップ物語』より難解な表現や言葉が沢山存在している。それにもかかわらず、『莊子』の奇想天外な比喩や寓話を織り交ぜた文章は、読者にとってやはり大変魅力があるものである。たとえば、中国文学史を繙いてみればすぐわかるように、古来多くの文人士が『莊子』を愛読し、その筆法までを手本とした作品も多く生みだされた。一方、中国文化に深い関係を持つ日本人の中でも『莊子』に親しみ、松尾芭蕉のように『莊子』寓話に常に言及した人物もいた²⁾。

なお、『百喻経』という寓話も注目すべきであろう。その全称は『百句譬喻集経』であり、また『痴華鬘』とも呼ばれる。「痴」とは、その多くの寓話の中に戒められている「痴人」、またはその「痴人」らがやった「馬鹿なこと」を指す。「華鬘」とは、花の冠の意であるが、古代インドで物語を語る体裁の一であり、いくつかの短い物語を集め、多くの美しい花で作った花の冠のようなものであり、一つの巨大な寓話群として集大成されたものであるということである。その撰者は古代天竺の高僧の伽斯那であり、紀元5世紀に中国南朝において天竺出身の三蔵法師求那毗地によって梵語から漢語に訳された。『大蔵経』に収められている仏教の一經典として、日本に早く伝来した。これもまた中日両国で、仏教界や一部の知識人にとってやはり親しみ深いものといえよう。

言うまでもなく、以上の三種の寓話はそれぞれ異なった性格を持つが、いずれも歴史が長く、社会に大きな影響を与えたものである。本稿の目的は『莊子』寓話を考察しながら、それを『百喻経』・『イソップ物語』にみられる寓話と比較して、寓話というものの共通性及びその魅力を探求するものである。

一 『莊子』寓話の例

司馬遷は『莊子』は大よそ寓言であると指摘した⁽³⁾。この事実は、今の『莊子』テキストによって確認できる。同書の寓言篇にも「寓言十九」と明記している。『莊子』の寓話には、孔子・恵子・公孫竜などのような歴史的人物も出ているが、しかし、彼らに関する話は、必ずしも事実とはいえず、文章の趣旨に合わせるためのフィクションも多いようである。架空の人物の名前や動物・昆虫なども多くみられ、二百以上の寓話が含まれるが、その全部を取り扱うのはまず無理であろう。ここではただその一部のみを選んで考察してみたいと思う⁽⁴⁾。

(1) 朝三暮四(齊物論篇)

猿飼いの親方が芋の実をわけ与えるのに、「朝三つにして夕方四つにしよう」といったところ、猿どもは皆怒った。「それでは朝四つにして夕方三つにしよう」といったところ、猿どもは皆悦んだという。表現も実質も変わりはないのに、それでいて喜びや怒りの感情が働くことになった。ただひたすらに自然に身を任せていくばかりだ。そこで、聖人は善し悪しの分別知を調和させて、自然の平衡に休息する。そうした境地を兩行すなわち対立したもののいずれもがスムーズに流れる立場というのだ。

「朝三つにして夕方四つにする」と「朝四つにして夕方三つにする」とは、実質が変わりはないのに、それでいて喜びや怒りの感情が働くことになった猿たちの感情をうまく治めるため、猿飼いの親方はただその話し方を変えただけだが、いい結果となった。しかし、逆の立場に立って考えれば、猿たちはその実質が変わりはないことについて全然気にしなかったため、騙されたともいえよう。但し、この寓話は人々に問題を解決する知恵を与えている。

(2) 胡蝶の夢(齊物論篇)

昔、莊周は自分が蝶になった夢を見た。楽しく飛び回る蝶になりきって、のびのびと快適であったからであろう。自分が莊周であることを自覚しなかった。ところが、ふと目が覚めて見ると、紛れもなく莊周である。いったい莊周が蝶となった夢を見たのだろうか、それとも蝶が莊周になっ

た夢を見ているのだろうか。莊周と蝶とは、きっと区別があるだろう。こうした移行を物化（即ち万物の変化）と名づけるのだ。

この寓話については、一部の漢文教科書にも採用されているし、多くの文学作品に繰り返して物語られているものでもある。そのため、多くの人にとってよく知られているのではないかと思われる。しかし、その趣旨については、一体どういうふうに理解すれば、適当であろうかということが、永久の課題となろう。

「ふと目が覚めて見ると、紛れもなく莊周である。いったい莊周が蝶となった夢を見たのだろうか、それとも蝶が莊周になった夢を見ているのだろうか。」という境地は、現実でありながら、非現実でもあるような微妙な描写である。これに対して古来解釈・引用は多かったが、一部の人は仏教の輪廻信仰や無常観（つまり万物は生滅流転し、永遠に変わらないものは一つもないということ）につなげて考えている。しかしながら、これは適当だとは思わない。極言すれば、「万物斉同」の思想を説明するために作った寓話であり、『莊子』の作者の独特な考えでもある。

（3）野生の雉（養生主篇）

沢辺の野生の雉は、十歩歩んでやっとならずかの餌にありつき、百歩歩んでやっとならずかの水を飲むのだが、それでも籠の中で養われることを求めはしない。籠の中では、餌は十分で気力は盛んになろうが、心楽しくはないからだ。

野生の雉の生活を例として述べているが、実は人間社会のことを指しているのであろう。野生の雉の生活は大変だが、自由自在に生活できる。もし籠の中で養われたら、餌は十分で何も心配する必要がないものの、心楽しくはない。作者が憧れるのはやはり個人の自由、特に精神上の自由、かつ束縛がない生活である。これは『莊子』の多くのところに示された人生態度と一致している。

（4）螳螂の斧（人間世篇）

あなたはあの螳螂を知っているだろう。その腕を振り上げて取り掛かった車の輪に立ち向かっていくが、それがとても自分の力には終えないことだというのが分からず、自分の才能の立派さを頼みとしているものだ。慎重の上にも慎重にしろ。あなたの才能の優れた点をこれ見よがしの誇りにしてあえて逆らうのは、危険なことだ。

天地篇にも同じ螳螂の話がある。実は、ここで中心的な役割を果たしている言葉は一句のみであるが、後世に深い影響を与えているものである。螳螂という昆虫は、危険を感じると、すぐその大刀のような腕を振り上げて、まるで車輪に立ち向かっているようにしている場面を、多くの人が見たことがあるかもしれない。昆虫の生活習性まで細かく観察した上で作られた言葉に違いないが、必ずしも『莊子』の作者が作った言葉とはいえない。もともと民間に存在していた言葉かもしれない。螳螂と車輪とを比較して見たら、前者は弱いもので、後者は強いものである。螳螂は車輪の前進を止めるほどの力は持たない。もし無理やり車輪に立ち向かえば、きっと悲惨な結果となることは言うまでもない。だから、身の程知らず無謀な行動はやめなければならない。

(5) 渾沌の死(応帝王篇)

南海の帝を儻しやくといい、北海の帝を忽こつといい、中央の帝を渾沌といった。儻と忽とは時々渾沌の土地で出あったが、渾沌はとても手厚く彼らを持って成した。儻と忽とはその渾沌の恩に報いようと相談し、「人間には誰にも七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をしたりしているが、この渾沌だけはそれがない。試しにその穴を開けてあげようということになった。そこで一日に一つずつ穴を開けていったが、七日たつと渾沌は死んでしまった。

初めてこの物語を聞けば、奇妙な気分をいっばい感じる。南海の帝 儻と北海の帝 忽とが中央の帝 渾沌の恩に報いようと相談し、人間には誰にも七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をしたりしているが、この渾沌だけはそれがない。試しにその穴を開けてあげようということになった、という。結局は七つの穴を開けていったが、中央の帝 渾沌は死んでしまった。三人とも偉い人物であり、互いに深い友情を持っている。しかし、その二人(儻と忽)は友人の渾沌のためと思っただが、勝手なことをした結果、親友の命が奪われた。この寓話の趣旨は、自然の規則に違反したら駄目であるということであろう。

(6) 西施の鬢ひそみに倣う(天運篇)

美人の西施が胸を病んで眉をしかめていたところ、その村の東に住んでいる醜女がそれを見て美しいと思い、家に帰ると同じように胸に手を当てて眉をしかめるようになった。村の金持ちはそれを見ると門を堅く閉じて外に出なくなり、貧乏人はそれを見ると妻子を引きつれて村から逃げ出してしまった。この醜女には、西施の眉をしかめた様子が美しいとわかったのであるが、眉をしかめたことがどうして美しく見えるのかという根本がわからなかったのだ。

西施は中国古代の美人であり、彼女が持つ美しさは自然のもので、人間の力で作ったものではない。しかし、無理やり西施を真似したら、美人になれないどころか、おかしくなる。「この醜女には、西施の眉をしかめた様子が美しいということはわかったのであるが、眉をしかめたことがどうして美しく見えるのかという根本がわからなかったのだ。」という結論は、真理である。もし美のことに正しい認識があるならば、無理やり他人を真似する必要がないのではないか。この寓話は『莊子』の美学思想を反映されている。

(7) 髑どくろ體を枕として寝る(至楽篇)

莊子が楚に旅をしたとき、すっかり肉の取れた髑體が目に留まった。かさかさでつやもないが、形は整っている。馬の鞭を振ってたたきつけると、そこで尋ねかけた。「いったい、あなたは生きる喜びをむさぼり道を踏み外して、それでこんなになったのか。それともあなたは亡国の変事にあい戦陣の誅戮をうけて、それでこんなになったのか。それともあなたは悪事を働き父母妻子にまで恥辱を残すことを恥じて、それでこんなになったのか。それともあなたは飢え凍える災難にあって、それでこんなになったのか。それともあなたの寿命がもともとこれまでのものであったのか。」そこで話し終わると、髑體をひきよせ、それを枕にして横になった。

夜なかのこと、髑體が夢枕にあらわれてこう言った、「あなたの話しぶりはまるで弁士のようだったが、あなたの話したことを考えてみると、すべて生きている人間どもの苦しみだ。死んでしまったらもうそんなものはない。あなた、死の世界の話を知りたいと思うかね。」莊子が「いかにも」

と答えると、髑髏は言った、「死んでしまえば、上に君主はおらず、下に臣下もいない。更に春夏秋冬の四季に追われる仕事もなく、心広々と天地自然の悠久の時間を春秋としている。南面の王者の楽しさでさえ、とてもこれ以上のことはないのだよ。」

莊子はそれを信じないで口を挟んだ、「私は司命の神に頼んで、あなたの体をもう一度甦らせ、あなたの骨肉や肌身をつけて、あなたの父母や妻子、郷里の知人たちのもとに帰らせようと思うが、あなたはそれを望むかね。」髑髏はひどく厭そうに眉をしかめるところいった、「南面の王者の楽しさを捨てて、人生の苦勞をもう一度繰り返すことなど、私にどうして出来よう。」

この寓話の主人公は莊子であるが、本当の『莊子』の作者とされる莊子ではなく、架空の人物である。人間である莊子が髑髏と直接にやりとりすることは不可能であることを配慮し、作者が奇妙な手法でその場面を上手く作っている。その登場の順序によれば、まず、莊子が髑髏を見て、その死因が知りたいと思って質問したが、直には返事がもらえなかった。次に、夜になると、髑髏が夢に現れ、その二人のやり取りすることが実現され、更に髑髏の口から人間として暮らしたとき、多くの悩みがあり、大変つらかったという。それに、「死んでしまえば、上に君主はおらず、下に臣下もいない。更に春夏秋冬の四季に追われる仕事もなく、心広々と天地自然の悠久の時間を春秋としている。南面の王者の楽しさでさえ、とてもこれ以上のことはないのだよ。」と、髑髏が心を開いて訴える。莊子は人間社会に帰りたいという旨を伝えたら、髑髏は意外にも「南面の王者の楽しさを捨てて、人生の苦勞をもう一度繰り返すことなど、私にどうして出来よう。」と返事したのである。

この寓話の趣旨については、一体どういうふうに理解すれば、最も適当であろうか。人間としての生活は辛いときもあるはずであるが、しかし、そればかり考えるならば、もう生きたくないというマイナスの結論を下すかも知れず、またこの寓話の本意にも反するのではないかと思われる。国君がおらず、束縛もなく自由自在に生活できる環境を望んでいるのは、作者の本心である。これは簡単に実現できることではあるまいが、『莊子』の多くのところにみられる思想の一つである。

(8) 美と醜 (山木篇)

陽子が宋の国に行ったとき、ある旅館に泊った。旅館の主人には二人の妾がいた。その一人は美人でもう一人は醜女であったが、醜女の方が大切にされて、美人の方は粗末にされている。陽子はその理由を尋ねると、旅館の若者が答えた、「美人のほうは自分で美人だと鼻にかけていますから、私には美しいとは思えません。醜いほうは自分で醜いと謙遜していますから、私には醜いとは思えません。」陽子は言った、「弟子たちよ、これをよく覚えておけ。優れた行いをしながら、自分でそれを優れたこととして誇る心を持たなければ、どこに行っても人々から愛されることだろう。」

この寓話については、前後の文章を読めば、それほど理解しにくいとはいえない。美と醜とは、人によって考え方が大変違うと思われる。一般的に言えば、外在的な美を重んじている方が多いのであろう。しかし、旅館の主人は普通の人と違い、内在的な美を重んじている。それに感動した陽子も、弟子たちに優れた行いをしながら、自分でそれを優れたこととして誇る心を持ってはならないと求めた。この寓話は上の(6)に挙げた西施の顰みに倣うという寓話と同じく、『莊子』

の美学思想を反映されている。

(9) 蝸角上の争い(則陽篇)

蝸の左の角に国を構えるものが出て、触氏という。また蝸の右の角に国をかまえるものが出て、蛮氏という。あるときこの二国が互いに土地を争って戦争をはじめ、戦場に転がる屍は数万人、逃げるものを追いかけて、半月もしてからやっと帰ってきたと言うことだ。

かたつむり
蝸牛は、でんでんむしとも呼ぶ。種類によってその大きさが違っているが、一番大きいのも人間より小さいはずである。しかし、上記の寓話には触氏と蛮氏との戦争の場面を作り、当時諸侯の間に頻繁に起きていた戦争を皮肉って批判している。奇抜なアイデアにより、読者に深い印象を与えたため、今日になると、中日双方において大局から見ると意味のないような小さい事柄で争うことに対してよく「蝸角上の争い」という言葉を用いている。

(10) 屠竜の技(列禦寇篇)

朱萍漫は竜を屠殺する技術を支離益について学び、千金の家産を使い果たしてしまった。三年たってその技術をすっかり習得したが、せっかくの巧妙さも役立てようがなかった。

この寓話を理解する際、まず竜というものは存在しなかったことを覚えておこう。存在しないもののため、わざわざその屠殺する技術を学ぶ必要はないし、明らかに時間・財物の無駄をすることであろう。

二 『百喻経』寓話の例

前に触れたように、『百喻経』は約千五百年前に梵語から漢語に訳された仏教経典である。題目に百という数字が冠されているが、実は98の寓話のみみられる。その構成は各篇同じで、まず寓話を語り、それからそのヒントを説明しながら、仏教教義を明らかにするものである。仏教経典の一つとしてとても有名だが、一般の民衆まで普及しているほどのものとはいえない。中国では、魯迅が高い評価を与え、また1914年に友人へ贈るため自費で百部の『百喻経』を出版し、更に1926年に「痴華鬢題記」を撰じたこともある。ここではただ『百喻経』にある一部の寓話の内容のみを選んで記す⁽⁵⁾。なお、それぞれのヒントの部分については、煩瑣を避けるため、解説(を付けているところ)として適当に紹介する。

(1) のどが乾いて水を見るとき

昔、何の智慧も持ち合わせていない人がいた。のどが乾いてしかたないので、水を求めて歩き回っていた。インダス河のほとりに出た。ところが、河に出て、すぐ水を飲むものと思ってみていると、ただ水の流れをじっとみているだけで、ちっとも飲もうとしない。そこである人がたずねた。「どうして飲まないのか？」答えは「もし全部飲み干すことができれば、多く飲むべきだが、あまりにも水が多いので、とても飲み干すことができそうにない。それで、じっと見ているのだ。」と。その話を聞いて、皆大笑いした。

元の解釈によれば、仏教の戒律が守れないという理由で、戒律を受けないことのたとえ。

(2) 三重の楼

大昔、何の智慧も持ち合わせていない愚人がいた。愚人が道を歩いていると豪勢な家が建っていて、見ると三重の楼であった。愚人は「自分には彼に劣らないほどの財産があるのだから、それ以上のものが造れないわけがない。」と考え、豪華な建物を造ることに決めた。すぐに木工こたくみを呼んで「君には造ることができるか。」と尋ねると、木工は「それは私の仕事だからできる。」と答えたので、愚人は「では私のために必ず造立ぞうりゅうしてくれ。」と頼んだのである。木工は地を均し、石を積み重ね、立派な三重の楼とその周りを囲む濠ほりを造って、ようやく完成することができた。時に愚人は、その建物を見て喜ぶどころか、かえって失望するのであった。愚人には最上階の楼だけがほしかったのである。木工を呼んで「私は下の二重はほしくないから何とかしてくれ。」と言う。木工は「そんなことができるわけがない。どうして最下を造らないで第二階が出来、第二階を造らないで第三重の屋を造ることができようか。」と説明しても、愚人はなおも「下の二重はいらないから、必ず私のために上だけ造ってほしい。」と哀願するのであった。人々は愚人の話を聞いて可笑しいと思って笑った。

元の解釈によれば、仏教の修行はしっかりとしなければ修得できないというたとえ。基礎的な段階から修得しなければいけないということ。

(3) サトウキビ

昔、ある二人が互いに協力してサトウキビを作り、「良く作った者に賞を与え、良くない者を重く罰するべきである。」と誓った。そのとき、ある一人は、「サトウキビはごく甘い。もしそれを搾って汁をとり、またそれを植えているサトウキビにやれば、きっと甘くて美味しいのだろう。そうすれば、彼を負かすことができる。」と考えた。早速、サトウキビを搾って、その汁をとり、またそれを植えているサトウキビにやった。美味しいものを作りたかったのに、その種を腐敗させてしまった。ついに、サトウキビのすべてを失ってしまった。

元の解釈では、「一部の俗人は善や福を望んでいるのに、権力や勢力を笠に着て人民をいじめている。また威張り散らして、財物を横取りし、よい結果を期待しているが、将来きっと災いとなる。このサトウキビを搾るように、両方とも失うことになる。」という。

ところが、もしこれを無視すれば、もっと想像の余地があるかもしれない。たとえば、上記の『莊子』(5)の渾沌の死という寓話と同じように解しても通じるのではないと思われる。つまり、自然の規則に違反したら駄目であるということである。ちなみに、『孟子・公孫丑上』⁽⁶⁾にある成長を早めようと思って苗を手で引っ張るといふ寓話にも同じものがみられる。つまり、功をあせて方法を誤るといふことである。

(4) 美味しい水を送る

昔、王都より五由旬ごじゆんの距離がある村があり、そこにはとても美味しい水があった。村人に毎日その美味しい水を送るようにと、王様が命令を出した。そのため、村人は大変苦しかったので、皆この村を去って遠いところに移りたいと思った。そのとき、村の主人は「お前達が移らなくてもいいように、わしは王様をお願いするよ。今の五由旬を三由旬に改めてあげる。そうすれば、近くなるし、行ったり来たりしても疲れなくなるよ。」と皆に話した。彼は早速王様をお願いして、

三由旬に改める許可を頂いた。それを聞いてから、皆大変喜んでた。ある人は、「ここはもと五由旬があるだろう、何も変わらないよ。」と指摘した。この話を聞いたけれども、王様の話を信用しているから、終に誰もその村を去っていかなかった。

元の解釈によれば、俗人が仏教修行するときの態度のたとえ。いやだと思うとき、すぐ離脱しようと考えているが、後また仏教の話を信じて、終には放り出さなくなるということ。ところで、もしこれも無視すれば、上記の『莊子』(1)朝三暮四という寓話と同じように解しても通じるのではないかと思われる。つまり、実質が変わりはないのに、それでいて喜びや怒りの感情が働くことになるということである。

(5) 蛇の頭と尻尾との争い

ある蛇のことだが、その尻尾がその頭に「わしが先にすべきだ。」と言ったが、頭は尻尾に「いつもわしが先にしたが、なぜ変えたのか。」と応じた。果たして頭が先にしたら、尻尾が木に巻きついて進めなかった。仕方がないから、尻尾を先にさせたら、みすみす不幸となってしまった。

元の解釈によれば、師弟関係のたとえ。若者の弟子は先頭に立つ人になりたいと思うが、若くて戒律をあまり知らないため、間違った行動をよくした。師匠もそれに巻き込まれて地獄に落ちたということ。ところが、また上記の『莊子』(9)蝸角上の争いという寓話と同じ、或いは似ている解釈でも可能ではないかと思われる。即ち、両者ともある共同体の二つ部分の争いを物語っているが、大局を無視して争った結果は大変悲惨ということである。

(6) 夫婦の餅の取り合い

昔、餅を3枚持つ夫婦があり、それを一人一枚ずつ食べると、一枚だけ残ってしまった。すると、その夫婦二人は相談して、「これから先にものを言った方が、餅を食べてはいけないことにしよう。」とルールを決めた。そこで、この一枚の餅のため、二人とも無言のままである。しばらくすると、泥棒がその家に忍び込んで、その全財産が取られてしまった。しかし、先に作ったルールがあるから、それを見ても二人ともやはり無言のまま。泥棒はその様子を見て段々大胆になり、少しずつ近寄って行き、終に妻に痴漢行為に及ぼうとし始めた。夫は動く兆しも見せないで、妻は突然怒りだし、「お前はなんてアホか。一枚の餅のため、泥棒を見ても黙っているままとは！」と夫を罵った。それを聞いて、夫は喜んで飛び上がって、笑いながら「あはは。この餅はついに俺のものになったね。お前にはやらない。」と言った。

元の解釈によれば、わずかの利益のため、安らかな様子のふりをするたとえ。

(7) 王女に恋する農夫

昔、ある農夫が都へ遊びにいったとき、世に稀な綺麗な顔を持つ王女を見た。すると、昼でも夜でも王女のことを思って止まなくなってしまい、王女に接近したいと考えるが、しかし、いい方法がない。そこで、顔色が悪くなり、重い病気になった。「どうしたのか。」と家族が聞くと、「先日、綺麗な王女を見て、接近したいと思ったができなかったため、ついに病になった。もし王女を得なかったら、私はきっと死ぬ。」と答えた。「王女が得られるようにするため、必ずい

い方法を考えるから、心配するな。」と家族は話した。後日、彼に会ったとき、「あなたのため頑張りたいが、ただ王女がそれを望んでいないよ。」と家族は話した。それを聞いて、農夫が喜んで笑いながら、「必ず（王女を）得る。」と大きい声で言った。

元の解釈によれば、季節を問わず、冬でも種を撒いて収穫を望んでも、実にそれはただ時間や努力の無駄で、何も得ないということのたとえ。世間の愚人は、あまり修得していないのに、もう満足して菩提の境地に達したと思っているということ。

（８）目が痛い女性

昔、ある女性が目の痛い病を患う。知り合いの女性が「目が痛い？」と聞いたところ、「目が痛い。」と答えた。その女性は答えて言った。「目があってこそ痛くなる。私の目はまだ痛くはないが、目を取り除きたいと思う。なぜならば、後日痛くなるということを心配するからだ。」傍らの人が言った。「目があれば、痛いときがあり、痛くないときもある。もしも目がなければ、一生涯の痛みだ。」

元の解釈によれば、富貴は衰えと災いのもとで、布施しないと、今後の報いが心配であるし、財産を多く持っていれば、その悩みが繰り返し出るというたとえ。もし布施すれば、苦楽があるが、布施しなければ、ずっと貧乏と苦痛があるということ。

（９）猿と豆

一匹の猿が手に一握りの豆を握りしめていた。豆を落とさないよう気をつけていたが、指の間から豆が一粒転がり落ちた。慌てた猿は手にした豆を放り投げて、落としした一粒を探した。猿が落としした豆粒を探しているうちに、放り出した豆は鶏や鴨にすっかり食べられてしまった。

元の解釈によれば、戒律を一つ破っても悔やまないため、更に放任するというたとえ。そのままであり続けたら、この猿のようにすべて放り出したことになるということ。

（１０）餅をもらった子

昔、ある乳母が子供を抱いて、歩いて旅をした。大変疲れたので、途中思わず寝てしまった。そのとき、ある人が餅を子供にあげた。美味しい餅をむさぼっている子は、回りの財物を顧みなくなつた。そこで、その人は子供の飾り物や服を全部持って行ってしまった。

元の解釈によれば、わずかの利益をむさぼるせいで、すべてのものを失ってしまったというたとえ。

三 『イソップ物語』寓話の例

イソップ寓話は、アイソポス（イソップ）が作ったとされる、動物寓話を中心とする寓話集である。日本では『イソップ物語』と呼ばれることが多い。すべての寓話に教訓が含まれており、現在でも童話、絵本などの形で広く読まれている。中国では日本とほぼ同じように、『伊索寓言』

の名で広く知られており、その一部の内容を小中学校の教材として使う場合もある。紀元前5世紀のギリシアの歴史家、「歴史の父」と呼ばれるヘロドトスの『歴史』によると、紀元前6世紀、サモス島の奴隷だったアイソポスが作ったとされているが、すべてがアイソポスの創作ではなく、それ以前から伝えられていた寓話、後世に創作された寓話、アイソポスの出身地（小アジアのどこかといわれる）の民話を基にしたものも多数含まれているとみられる。ギリシア語の原典は失われており、現存するのは古代及び中世にバブリウス、ファエドルス、アヴィアヌスによってまとめられたラテン語のものである。『イソップ物語』が初めて英語に翻訳されたのは1484年、イギリス最初の出版業者ウィリアム・カクストンによって出版した。これはドイツ語版のフランス語からの重訳である。十七世紀中葉以後、また新しい訳本が相次いで世に現れた。

前に述べたように、『伊曾保物語』と称された最初の和訳本の出版も、中国での最初の出版とほぼ同時期の江戸初期にあり、その後も繰り返し出版・再版されたことがある。現在、『イソップ物語』に関する和訳・漢訳のテキストは大変多いが、ここでは中国で出版された児童向けのテキストである、141の寓話を収めたヒントの説明が付けられていないもの⁷⁾によってその一部を訳出し、またそれぞれのヒントについて解説してみたい。

（1）亀と兎

亀と兎が、誰が最も早く走れるかについて争っている。そこで、競走で勝負を決めようということになり、時間と場所とを約束すると、その競走はすぐ始まった。兎は自分が生まれつき足が速いと思っているので、今回の競走をあまり気にならなかった。しばらく走ると、道端で一眠りをした。一方、亀は自分の足が遅いということを実感していたので、懸命に進み、すこしも休まなかった。終に亀は眠っている兎を追い越して、チャンピオンの座を獲得した。

亀を軽く見ているから、もともと優位を占めていた兎は意外にも惨敗した。亀は生まれつき足が遅いけれども、自信を持って懸命に進み、終に大勝を取ったのである。これは『イソップ物語』寓話の中でも最も有名な寓話の一つであり、各国の子供の成長に大きな影響を与えたものでもある。

（2）農夫と蛇

ある農夫が、冬に一匹の蛇が凍っているのを見かけた。可哀そうと思ったため、その蛇を懐に入れた。暖かい空気を受けて、その蛇はついに息を吹き返したが、その本性が完全に回復すると、その恩人に咬みつき、致命傷をさせた。その農夫は死ぬ間際に、「私は悪人に同情したため、この悪の報いを受けなければならない。」と言った。

ここでは蛇は悪い人間の代表となったようだが、実は一般の蛇ではなく、毒を持つ蛇である。ここから転じて「悪人に同情するな」ということになったのである。

（3）泥棒と雄鶏

数人の泥棒がある民宅にこっそり入ってきた。何も見つけられなかったが、ただ一羽の雄鶏を見て、それを掴まえて逃げてしまった。殺される前、雄鶏が解放してほしいとお願いした、「夜が明ける前に、皆を起こして働かせる。そうならば、人間に利益があるだろう。」と言った。泥棒たちが「だからこそ、お前を殺さなければならない。皆を起こしたら、わたしたちの盗む行為を許さ

ないのと同じだ。」と答えた。

雄鶏は泥棒も人間だと思っているので、人間に利益があると説明してあげたら、自分の身も安全になるのではないかと思ったのに、やはり泥棒に殺された。泥棒は普通の人間ではなく、その本質を知らなければいけないということである。

(4) 胃と足の争い

胃と足とがどちらの力が最も強いのかについて争っている。足は自分が強いと言う。なぜならば、胴体を全部運ぶことができるからだ。ところが、胃は次のように答えた。「もしもわしが食べ物を受けつけなければ、お前たちは何も運ぶことができなくなるのではないか。」

同じ共同体に生活しているものは、互いに協力しなければならないというたとえ。胃も足も重要で、どちらかがいなければ、全身体に悪い影響を与えることになるし、もし片方の役割のみ強調すれば、無意味なこととなるのである。ここまで読めば、上記の『莊子』(9) 蝸角上の争い、『百喻経』(5) 蛇の頭と尻尾との争いという寓話を思い出すと、一層面白くなるかもしれない。三つの寓話はいずれもある共同体の二つの部分のものの相争う内容である。ただし、この寓話は前の寓話と比べれば、そんな悲劇のような重い話をしていない。なお、上記にあげた10個の例の他、『莊子』にはまた井蛙の見という寓話があり、それは井戸の中に住んでいる蛙は外の世界を知らず、見聞の狭い者を皮肉っているものである。ここでの足も井蛙と同じく、自分のことしか見ていないので、やはり見聞の狭い者であろう。

(5) ともし火

ともし火が油を飲んで酔っ払っていて、とっとも明るくなったので、自分は暁の星や太陽よりずっと明るいと思っている。しかし、一頻り風が吹いてくると、ともし火は消えた。主人は改めて火を付け、また次のように言った。「ともし火よ、自慢するな。これからは安らかに明かりを出しなさい。知っているか、星の明かりは消えたことがないということ。」

ともし火は暁の星や太陽よりずっと明るいと思っているが、残念だが、それは事実ではない。いつも自分のことだけを自慢するならば、やはり井戸の中に住んでいる蛙と同じく見聞の狭い者であろう。社会のメンバーとして、一人の力は限られていることや、互いに協力しなければならないこと、及び回りの人間の役割などについてはもっと理解しなければならないのである。

(6) 肉を銜える犬

ある犬が肉を一枚銜えながら川を渡っている。水に映る自分の影をふと見ると、もう一匹の犬がもっと大きい肉を銜えているのではないかと思った。そこで、その肉を奪おうと思い、口に銜えている肉を捨てて、いきなり水の中に突き進んだ。結局二枚の肉ともなくした。つまり、一枚の肉は水に映る影だから、もともと存在していなかったし、もう一枚の肉も本物だが、川に落ちて流れていってしまったのである。

この寓話に登場した犬は欲張りで、口に肉を一枚銜えていてもまだ満足できない。もともと存

在しなかった肉さえも、自分のものにしたいと考えているから、結局意図したとおりにことが運ばないどころか、もともと持っている自分の肉でさえもなくなってしまったということである。

(7) 獅子と三頭の雄牛

三頭の雄牛が一緒に草を食べている。それを見た獅子は、近くのところで待ち伏せをしながら、牛を食べたいと思いつつ、攻撃する勇気がない。なぜならば、三頭の雄牛が結束しているからだ。最後の手段として、獅子は牛たちをそそのかしてその間柄を裂いてから、各自が草を食べる機に乗じて、たやすく三頭の牛を相次いで食べてしまった。

老若を問わず誰でも、この話の趣旨が団結は力であるということははっきり読み取れる。特に子供にとっては、このような寓話を聞くと、単純なスローガンより団結の重要性がもっと深く理解できるのであろう。

(8) 冗談が好きな牧人

ある牧人は、いつも羊を村から比較的遠いところに追っていき放牧させているが、冗談が好きな彼は、よく羊が狼に襲われたふりをし、「助けてくれ」「助けてくれ」と村の人々に大声で叫んでいた。初めの二、三回ぐらいは、村の人々は慌ててやってきて助けてあげようとするが、何もなかった様子を見て、皆笑いながら村に戻った。その後、狼が本当に現れた。彼はまた大声で「助けてくれ」「助けてくれ」と叫んでいたが、村の人々は今回も冗談だろうと思ったので、誰もやってこなかった。結局は、彼の羊は全部狼に食べられてしまった。

一般的にいえば、この寓話は嘘をつく子供の教訓として大変有名である。「狼が来た」と言えばほぼ知らないものはいないと思われる。今回のタイトル「冗談が好きな牧人」は中国語によって直訳したものである。嘘と冗談とはやはり区別があるはずであるから、「冗談が好きな牧人」という訳は、批判というイメージはそんなに強くないが、褒めているわけでもない。嘘は絶対いけないのに対して、冗談は適当にすれば、悪いとはいえないが、やりすぎれば誤解などの悪い結果をもたらす可能性がある。注意を払わなければいけない。

(9) 沐浴する子

ある子供が川で体を洗っていると溺れてしまい、死にそうになっていた。たまたま道を通っている人を見かけたので、「助けて、助けて」と救いを求めた。その人は「無謀なことをするからだ。」と子供を責めたが、子供は、「さきに手を貸して川から助け出してくれてから責めればいいだろう。」と答えた。

危機に瀕する子供に対して、すぐに手を貸してあげるのは、当然のことである。子供の教育も必要であるが、命を助けることの方がより大切である。つまり、その軽重と緩急に気を配らなければならないということである。この寓話を讀むと、『莊子』外物篇に典拠がある鞞の急という言葉思い出した。それは上記の例の中に含まれていない寓話であるが、鞞の水たまりにいる鮒のようなひどく危急に瀕するものに対しては、早く手を貸してあげなければならない。そうしなければ、きっと死ぬというものである。二つの寓話はやはり共通点があるのであろうか。

(10) 蚊と獅子

ある蚊が獅子の前に飛んできて、次のように言った。「お前を怖いとは思わない。わしより強いのではないだろう。そうじゃなければ、お前は一体どのような力があるのか。爪で捕らえることができるのか、それとも牙で噛みつくことができるのか。女が男と喧嘩するときにもすることだね。わしはお前よりずっと強いのだ。もしその気持ちがあるならば、勝負といこうじゃないか。」と。すると、蚊はラッパを吹きながら突き進んできて、獅子の顔に毛が生えていないところだけを刺す。獅子はかんしゃくを起こして自分の顔を爪で傷つけてしまった。獅子を負かしてから、蚊はまたラッパを吹いたり、凱歌を上げたりしながら飛んでいった。だが、クモの巣に当たってしまった。まもなくクモに食われる前、蚊は嘆いて、「最も強い動物と勝負したことがあるのに、思いがけずごく小さなクモめにやられてしまった。」と言った。

弱いものはいつでも弱いとは限らない。言うまでもなく、獅子は蚊よりずっと強い。しかし、今回は蚊が知恵を用いて獅子を負かした。この寓話の前半を通じて、誰でも弱者は強者に勝つ可能性もあるという趣旨が読み取れる。しかし、後半に反映されているのは勝利を収めたものが油断することはいけないということである。蚊は獅子にうち勝って有頂天になり、周囲の危険をすっかり忘れて、結局クモの巣に当たってしまった。この寓話を読むと、『莊子』山木篇に典拠がある「螳螂は蝉をとるが、雀は後ろで螳螂を狙っている（螳螂捕蟬、黄雀在后）」という言葉を思い出す。これも上記の例には含まれていない寓話であり、登場した動物や昆虫、及び文の構造が異なるものの、その目の前の利益のみ考えているという趣旨は似ているところがあると思われる。

『莊子』と『百喻経』と『イソップ物語』との寓話の比較

以上、三種類の寓話から10個ずつの例を挙げてみた。任意に選んで抽出したものであるが、これらを全体を代表する例として考えていきたい。考察の便を図るため、上記の例を一覧表にまとめてみる。

三種の寓話例のタイトル一覧表

『莊子』寓話の例	(1) 朝三暮四 (2) 胡蝶の夢 (3) 野生の雉 (4) 螳螂の斧 (5) 渾沌の死 (6) 西施の顰みに倣う (7) 髑髏を枕として寝る (8) 美と醜 (9) 蝸角上の争い (10) 屠竜の技。
『百喻経』寓話の例	(1) のどが乾いて水を見るとき (2) 三重の楼 (3) サトウキビ (4) 美味しい水を送る (5) 蛇の頭と尻尾との争い (6) 夫婦の餅の取り合い (7) 王女に恋する農夫 (8) 目が痛い女性 (9) 猿と豆 (10) 餅をもらった子。
『イソップ物語』寓話の例	(1) 亀と兎 (2) 農夫と蛇 (3) 泥棒と雄鶏 (4) 胃と足との争い (5) ともし火 (6) 肉を銜える犬 (7) 獅子と三頭の雄牛 (8) 冗談が好きな牧人 (9) 沐浴する子 (10) 蚊と獅子。

タイトルのみ見れば、三種の寓話はいずれも擬人化された動物、昆虫などを登場させており、確かに共通点がある。一部の寓話については、たとえば、『莊子』の「蝸角上の争い」と、『百喻経』の「蛇の頭と尻尾との争い」、『イソップ物語』の「胃と足との争い」の発想とは同じであり、

また『莊子』の「朝三暮四」と『百喻經』の「美味しい水を送る」との発想も近い。もし更に上に挙げた例以外の寓話と比較して考えれば、より多くの共通点が発見できる。その具体的な内容については、前文を参照してほしい。

まず、『莊子』寓話については、紀元前4、3世紀前後に成立し、すべて文章化されたものである。長いものもあるし、短いものもある。元はタイトルがなかったので、本稿に挙げた例のタイトルはその内容によって付けたものである。理解し難いところが多いものの、その前後の文章をよく読んで、更にゆっくり考えれば、想像できる余地が多い。言い換えれば、一部の寓話をパッと見れば、その趣旨が一体何であるのか、さっぱり分からない場合もある。しかし、時間をかけて、深く考えれば、頭に必ず何かが浮かんでくるということである。もちろん、それは必ずしも作者の真意を捉えたとはいえないであろう。要するに、『莊子』寓話は深い意味を持つため、簡単に理解できるわけではないということであるのだが、これは『莊子』という書物の成立過程とも関係がある。多くの場合において考えていることをそのまま直接には話せないため、頻繁に比喻や皮肉を含めた寓話の手法でそれを語ったのである。言うまでもなく、もし『莊子』の思想を理解しようと思えば、まずその寓話を解説しなければならない⁸⁾。

次に、『百喻經』寓話については、仏教の諸經典から集めたものといわれるため、その起源は相当古いのにもかかわらず、具体的な年代はなかなか判断し難い。しかし、漢語に訳されたのは5世紀に違いない。この寓話は『莊子』寓話とは異なり、仏教經典であるから、仏教の教義に合わせて説かれている。その漢訳は口語に近い文体を用いているので、やはり『莊子』寓話より理解しやすいといえよう。しかし、インド文化や仏教文化に関わっているので、一般人にとって理解しにくいところもある。もちろん、全体を見れば、元の解説を参考にしながら、その趣旨が理解できないというわけではない。ただし、その解説は宗教的な内容が多いので、一般人にとっては、やや分かりにくいかもしれない。多くの寓話はもとの解説を離れて、更に広く解釈することも可能であろう。

次に、『イソップ物語』寓話については、上記の二種の寓話より更に理解しやすいものである。中国語版の内容によれば、その趣旨がほぼ説明しなくても捉えることができる。複雑な、婉曲な話はあまり出てこないから、ほぼ話している内容のままで理解できる。本稿が用いている『伊索寓言精選』というテキストの「後書き」⁹⁾では次のように指摘されている。「各寓話の末尾に“道徳教訓”が付けられているが、それは後人によって挿入されたものであり、中には趣旨を離れ牽強附会になったり、または物語の本意を歪曲したりしたものも多いのである。これらの評語や解釈はすでに全部削除したが、われわれの少年児童はその物語からその寓意を捉えることができると信じている。」と。これは正論といえるかもしれないが、読者の年齢によって区別して対応しなければならない。

理解の便を図るため、以上に検討した三種の寓話の異同については、次の一覧表にまとめてみた。

三種の寓話の異同一覧表

書名 項目	『莊子』	『百喻経』	『イソップ物語』
時代	紀元前4、3世紀前後に成立したが、現存する三十三篇のテキストは3、4世紀にまとめられた。	5世紀に漢訳された。	約紀元前6世紀に成立したとされるが、原型はあまり残っていないと考えられる。17世紀に漢訳、和訳された。
分類	哲学経典	仏教経典	今児童書とされる
難易度	難しい	やや難しい	難しくない
読者	研究者と一部の文人	僧侶と一部の文人	ほぼ社会の全員
共通点	いずれもある物語に託して一つの道理を説き明かしたものであり、適当な比喻である教訓または風刺を含めたものでもある。 一部の寓話の発想も同じ、もしくは近い。		

寓話の働きと魅力

寓話は物語の一種であるが、単純な物語ではなく、ある真理を語るためのフィクションである。しかし、真理と呼ばれていても全てが絶対のものではない。たとえば、ある人・集団などが、その人・集団の立場を以って真理と考えているものは、他人・他集団の立場によって見るならば、必ずしも真理とはいえない。しかし、各種の寓話、たとえば本稿に挙げた三種の寓話に対し、もし偏見を持たずに客観的に判断すれば、やはり共有される価値がある。実は、いずれの寓話でもふさわしい場面であれば、それを活用することが可能である。まさにこの特徴があつてこそ、寓話には普遍的な意義があり、それを読むと、誰でも自分の人生や生活態度の参考にすることのできる可能性がある。

『イソップ物語』は、約2世紀から既に児童書になり始め、今日では、『イソップ物語』といえば、ほぼ童話のイメージが定着している。しかし、これは作者とされるアイソポス(イソップ)の本意ではない。『イソップ物語』はもともと児童のために作ったものではないはずである。もちろん、今日われわれが見ることのできる『イソップ物語』には、原型はあまり残っていないと考えられる。ただ現在のテキストによれば、少数の例外の他は、ほとんど皆がよく知っている動物の話であった。数多くの擬人化された可愛い・ずるい・凶悪な性格を持つそれぞれの動物を登場させてこそ、その寓話の面白さが一層高まり、童話の素材と見なすことのできる理由となっているのではないと思われる。『イソップ物語』にはお説教をするイメージはなく、ただ生活の色々な経験、教訓などを語り、人々に色々な生活の知恵、また生活の勇気を読者に与えてきた。長い間、各種の言葉で出版された『イソップ物語』に関する書物は世界の至る所で発売され、その影響は決して一般人だけではなく、政治家にまでも及んでいた。一例として、バーバラ・ペイダー氏の「イソップ寓話の歴史」によれば、「エイブラハム・リンカーンも寓話をそらんじていました。彼の家族は、幼いエイブラハムがある晩、声に出してイソップを読んでいたことを回想しています。大統領になったリンカーンが、執務室で、遊説先で、ホワイトハウスで寓話を語ったことは、100回以上も記録されています。……1853年の選挙で党の団結をうったえるために、彼はまずイソップの『棒のたば』を語り……南北戦争のとき、サムター要塞をあきらめると詰めよられた彼は、イソップの『ライオンと木こりの娘』を語りました」という⁶⁰⁾。

ところが、『莊子』と『百喻経』とはそれぞれ『イソップ物語』と比較してみれば、いずれも面白いイメージがあり、それは『莊子』の哲学書、『百喻経』の仏教経典という性格によったものである。とはいえ、『莊子』と『百喻経』とは『イソップ物語』と同じく、非常な魅力がある。『莊子』について、陳鼓応は次のように述べたことがある¹¹⁾。

「先秦諸子によって展開された学術論争により、わが国の思想史における一つの黄金時代が切り開かれたのである。儒・道・墨・法等の諸大学派の中において、莊子学派は道家思想の集大成である。『莊子』の文学形式を活用することによって表現される哲学システムの複雑性・詭弁性も各学派に勝っている。文学の分野においては、独特の風格を持つ『莊子』は常に後世のロマンチックな作品を導き出す思想の源となったのであり、哲学の分野においては、魏晋時代の玄学と禅宗との思弁を直接呼び起こしたのである。中国哲学史における主な論題と基本的な概念には、『莊子』によって誘発されたものが少なくはない。社会思想や人生態度においては、莊子思想は明らかに消極面でも啓示に富む面でも後世に深刻な影響を与えた。」

『莊子』は確かに中国思想史における大きな存在であり、中国人の生活、文化に大きな影響を与えたものである。もしも『莊子』に寓話が存在しなければ、恐らく多くの文人たちの心も魅かれなかったのではないと思われる。『百喻経』も同じく、もし寓話の形ではなく、単純な説教書であったら、恐らくその影響力や知名度は今の状態に及ばなかったであろう。近年、中国では『百喻経』に内在される高い価値についてますます多くの人々に理解され、それに関する書籍も前より多く出版され、今後その愛読者も一層増えてくるであろうと予測されている。

なお、『イソップ物語』寓話の起源、また東洋寓話との関係については、今まで諸説があり、大変複雑な様相を呈しているが、上田敏が撰した「伊曾保物語考」という論文には、多くの事柄を考証しており、『百喻経』を含めた仏教経典の名にも言及している。深く検討した上で、上田は次のように述べている。

「動物談は民俗伝説の一部で、太古人又未開人の活物説に起原し、世界中いづれの国民間にも発生する。而してもしこれを教訓、諧謔の具に用ゐる時は、動物譬喩談（或は喩言、笑話）が生じる。文化を有する国民中でこの文学上の一形式を十分に彫琢して、人口に膾炙するほど発達させたのは、東に印度と西に希臘とであつた。（中略）古く古くと遡つて伊曾保物語の起原を尋ねたのは、宛も吉田兼好八歳の時『仏はいかなるものにか候ふらむ』と父に問ひ『第一の仏は、いかなる仏にか候ひける』と終に迫つた語のやうであるが、これは『空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ』と反らすには及ばぬ。動物譬喩談は民俗説話の一種である、東洋或は西洋の専有物で無く、汎く人間の心理状態から発生したものと断言される。」¹²⁾と。

言うまでもなく、本稿は動物寓話を中心とした『イソップ物語』だけではなく、『莊子』・『百喻経』にみられる寓言をも取り扱っている。ここで挙げた例から見れば、三種の寓話には発想が同じ、または近いものもある。『莊子』・『百喻経』は動物寓話を中心とするものではないものの、いずれも擬人化された動物、昆虫などを登場させており、確かに『イソップ物語』と共通点がある。ここから考えれば、寓話というものは動物談と同じく、いかなる民族においても専有したのではなく、汎く人間の心理状態から発生したものともしよう。

お わ り に

上記で検討されたことにより、若干の問題について次のようにまとめたい。

(一) 世界には多くの寓話が存在している。本稿に例として挙げた『莊子』・『百喻経』・『イソップ物語』の寓話は、それぞれの歴史、特徴などを持つが、いずれも社会に大きな影響を与えた貴重な人類文化遺産であり、共有する価値があるものである。

(二) 『莊子』は理解し難いところが多く、それはその成立の歴史と関係があり、多くの場合、考えていることをそのまま直接には話せないため、頻繁に比喻や皮肉を含めた寓話の手法でそれを語ったのである。もし『莊子』思想を理解しようと思えば、まずその寓話を解釈しなければならない。

(三) 『百喻経』は仏教の諸経典から集められたものであり、仏教の教義に合わせて語られているものでもある。原文に付けられた解釈は撰者が入れたものとされ、それを参考にしてそのヒントが理解できないわけではないが、元の解釈を離れて更に広く解することも可能である。

(四) 『イソップ物語』は、世界で最も広く読まれている寓話であり、多くの擬人化された動物を通じて、人々にいろんな生活の知恵、また生活の勇気を与えてきた。約2世紀から既に児童書になり始めたものの、長い間、各国の少年児童だけではなく、一般の大衆から政治家まで大変喜ばれてきたものである。

(五) 本稿に挙げられた例を見れば、『莊子』と『百喻経』、『イソップ物語』の寓話には発想が同じ、または近いものもある。たとえば、「蝸角上の争い」と「蛇の頭と尻尾との争い」、「胃と足との争い」などである。

注

- (1) 彦生・林京訳『伊索寓言精選』(中国少年儿童出版社、1987年3月)、上田敏著「伊曾保物語考」(『定本上田敏全集』第9巻所収、教育出版センター、1985年3月)、バーバラ・ベイダー文・いずみちほこ訳『イソップ寓話集』(セーラー出版、1999年4月)などを参照。
- (2) たとえば、『田舎の句合』や『常盤の句合』における芭蕉の判詞では、『莊子』寓話の引用、またはその手法に真似た作品が見える。『校本芭蕉全集』第七巻、宮本三郎・井本農一校注、富士見書房、1989年7月を参照。
- (3) 『史記』(中華書局、1975年3月)巻六十三を参照。司馬遷の原文は「大抵率寓言也」。行文の便を図るため、このような特例以外は、本稿では日本語にある「寓言」と「寓話」の二語をほぼ「寓話」に統一した。
- (4) 郭慶藩著『莊子集釈』(『諸子集成』三、中華書局、1990年8月)、陳鼓應注訳『莊子今注今訳』(中華書局、1991年6月)、金谷治訳注『莊子』(岩波書店、2004年12月)を参照。
- (5) 『魯迅全集』第七巻(人民文学出版社、1991年)、『百喻経』(『大蔵経』第4巻所収、新文豊出版公司、1994年4月、または華夏出版社、2005年8月単行本)を参照。
- (6) その寓話の内容は次の通りである。「昔、宋の国のある百姓が、苗の成長が遅れているのを心配して、何とか早めたいものと一本一本引っ張ってやった。グツタリ疲れきって家に帰るなり、「ああ、今日は疲れたわい。苗を皆引き伸ばしてやったものだから」と家のものに話したので、息子が変に思って急いで田圃へ駆けつけてみたら、苗はすっかり枯れていたとのことだ。」という。焦循『孟子正義・公孫丑章句上』(『諸子集成』一、中華書局、1990年8月)、小林勝人訳注『孟子』(岩波書店、1993年4月)を参照。
- (7) 前出(1)『伊索寓言精選』の「内容提要」において“142篇”を収めると明記されたが、実は141篇のみある。
- (8) 『莊子』思想を研究する場合、『莊子』原典の意味によってその寓言の元の意味を追求しなければならないが、一般人としては『莊子』原典を離れて、勝手に解釈する場合もしばしばみられる。
- (9) 前出(1)『伊索寓言精選』の「編後記」を参照。
- (10) 前出(1)『イソップ寓話集』所収バーバラ・ベイダーの「まえがき イソップ寓話の歴史」を参照。
- (11) 前出(4)『莊子今注今訳』「修訂版前言」を参照。
- (12) 前出(1)上田敏著「伊曾保物語考」を参照。